

白亜紀を彷彿とさせる大きな葉、澄んだ藍色の空、有明の月。

三十分前、目を覚ました直後の視界にあつたものはそれくらいだ。頭蓋骨を殴られているみたいなの頭痛がする。絶望的な気分だ。

「目、覚めたんだ」

唐突に、斜め後ろから女性の声がした。振り返ってみると、水色のワンピースを着た女の子が立っていた。肌が白い。というか、髪も、目も、全体的に色が薄い。霧がかつているみたいだ。

「あの、僕の名前は」

「名前くらい知っているわ」

「そうじゃなくて。まいったな、自分の名前が出てこない。申し訳ないけど、君の名前も、顔も、なんか初めて見たみたいだ。頭も痛い」

本当のことだ。僕は目の前にいる女の人のことはおろか、自分のことまでよくわからないうのだった。「しっかりして」と女の人

つた。細く、芯の通った声だった。

「あなたは堺聡太。私……私は、ミサキ。乗っていた船が難破したのは覚えてる？」

「難破……ああ、そうか」

そうだった。僕はたしか、客船に乗っていた。豪華客船つてわけじゃなかったが、一緒に乗っていたのがいい人たちで、居心地が良かった。それが突然音を立てて揺れ始めたのだ。すごく怖かったことは覚えているのに、何がどう怖かったのか思い出せない。

「堺くん、昼からずつと目を覚さなかつたのよ。体調はどう？　つらくない？」

「頭が痛いのと、あと記憶がちよくちよく飛んでるな」

「しつかりして」

二度目の「しつかりして」だ。僕は思わず頭を掻いた。すると、爪の間になにかジャリジャリしたものが入り込んだ。砂だった。頭だけではない。僕は、シャツもズボンも、その生地が見えないくらいびっしりと砂に覆わ

れていた。「どうしてこんなに砂まみれなんだ」と独りごちた。

するとミサキさんは、いきなりころころと笑いだした。「あら、ほんとだ。ごめんなさい」と言つて、僕のシャツの袖を掴んだ。心臓まで掴まれたような緊張が走った。そして次の瞬間、まるで排水溝の中に浴槽の水が流れ込んでいくように、僕の体にまとわりついていた砂がある一点に向かって滑り始めた。ある一点、つまりミサキさんの指に向かって。

移動した砂はミサキさんの指に触れると、途端にその姿を消した。まるでミサキさんが手から砂を飲み込んでいるようだった。僕はその不可思議な様子を、瞬きも忘れて凝視していた。

僕の体についていた砂がただの一粒も残らずに消えると、ミサキさんは僕の袖から手を離した。そして何事もなかったかのように、「着いてきて」と、僕に背を向けて歩き始めた。僕は慌ててミサキさんを追った。体全体

がどうにも痛くて、なかなか追いつけない。

「ちよつとまつて。いまの何？」

「何つて……ニンゲンなら誰でもできることよ。よほど記憶が飛んでるのね」ミサキさんは振り向かなかつたし、立ち止まることもしなかつた。「そんなことはないと思うけれど」と、思つたままのことを口にした。

「まあ、いいじゃない。細かいことを気にしてる暇はないわ。とにかく森に行きましよう。ずっと潮風が直に当たっているのも良くない

でしょう」

「まつて」

「なあに？」

ミサキさんはようやく振り返つた。

「手元に食料がないと不安。あと今すごくお腹すいてる」

「あつ、そつか。手間かかるのね」

「いや、食料はないと困るよ。森になにかあるかもしれない。果物とか」

僕がそう言うと、ミサキさんは少し考える

ように首をひねり、それなら道中で食べられ  
そうなものを探そうか、と言った。大賛成。  
実際のところ僕は、感じたことがないレベル  
の空腹に襲われている最中なのだ。

森の中に入る。砂浜にいたときよりだいぶ  
涼しい。だいぶ戻ってきた記憶によると季節  
は秋なのだが、常緑樹が多いのか森は緑一色  
だった。

空高くに名前も知らない木が伸びていて、  
どうやら実をつけているようだが、あそこま  
で登っていける自信はない。結局、足元に視  
線を落とした。白っぽいきのこや、シダ植物、  
こけ、青色の小さな花。

「どれが食べられるのかわかんないなあ」  
しゃがんだときに、バキ、と太ももの付け  
根が鳴った。視線が地面に近くなると、さら  
に色々なものが見えてくる。小さな白斑があ  
る黄色いキノコが、四つほどまとまって木の  
根元に生えている。その横には低木があつて、  
みかんくらいの大きさをしたブルーベリーの

ような奇妙な実をつけている。ぜんぶ毒に見えてきたな。

急に、肩を叩かれた。どきりとする。心臓がバクバクしているのが分かった。ミサキさんは僕の隣にしゃがんだ。顔が近い。けれど、なぜか緊張が和らいでいく。ミサキさんは美人だけど、どこか親しみのある顔をしている。ミサキさんは、両手で何かを包んでいた。

「これ見て」と言つて、ゆつくりとその手を開いた。ぎよつとした。中にいたのは、一匹の小さなコオロギだった。

「この虫、脚の数が左右で違うわ」

「えっ」

「ほら」

たしかに、バネの役割をするはずの折れ曲がった太い脚が、右側にはなかった。そのせいで重心が左に傾いている。黒く小ぶりのコオロギは、触覚をふよふよと揺らすばかりで、ミサキさんの手のひらから逃げる気はないようだ。ミサキさんは心配そうに、コオロギと

僕を交互に見ている。

「コオロギの幼虫だね。こいつは脱皮するか  
ら大丈夫だよ」

意図したつもりじゃなかったが、やけに優しい声が出た。「脱皮」とミサキさんは繰り返した。

「うん。不完全変態生物の幼虫はね、脱皮すればもげた脚も元通りになるんだよ」

「そうなの！ よかった」ミサキさんは、蕾がほどけて花が開く瞬間のように笑った。花

の開花なんて、そんな劇的な瞬間は見たことがないけれど、ほとんど同じようなものを僕は見たのだと思う。純粹で穢れのない、清らかな光景だった。

ふいに、ミサキさんが不思議なものを見る目で僕を見ていることに気がついて、自分が見惚れていたのだと察した。

照れくさい。僕はコオロギに視線を移した。

「でも、成虫は怪我をしてもそのままらしい」

「幼虫のほうが強いのか？」

「ああ、ちよつと違う。欠陥があつても生きていけるようにできてるんだ。その欠陥が目的を達成する妨げにならないのなら」

「目的つてなに？」

「幼虫は成虫になることが目的。成虫は、子孫を残すことが目的。目的に対応して体の仕組みまで変えちゃうなんてね。いいな。エネルギーの使い道がはつきり決まつてる」

僕が言い切るのと同時に、コオロギがミサキさんの手のひらから地面に飛び降りた。二、三回ジャンプしただけで、コオロギはあつという間に視界から消えた。

体に負担をかけないように、慎重に立ち上がる。辺りはだいぶ暗くなっていた。夜特有の冷たい空気が肺を冷やす。空を見上げてみると、写真でしか見たことのないような、満点の星空が広がっていた。もしかしたらここは天国なのかもしれぬ。

「目的に合わせて体の仕組みを変えるつて、



私、コオロギと気が合うかもしれないわ」ミサキさんが言った。

「コオロギと？」

「うん、コオロギと。コオロギと気が合うニンゲンって、堺くんは見たことある？」

「ないなあ」

「そうなの！　ないのね。それって、なんだか少し嬉しいわ」

ミサキさんはそれ以上なにも言わずに歩き出した。僕はその後を追った。まだ恥ずかしそうなコオロギや鈴虫の歌の向こうで、海鳴りの音が響いていた。

次の日の朝、目が覚めると、全身にびっしりと汗をかいていた。手の中で雪が解けるように、夢の中で見ていた景色は普通すぐ消えてしまうものだが、今回は違った。脈が早くなるのにつれて、消えるどころかどんどん鮮明に思い出されていく。記憶が蘇るのと同じ時に、涙が溢れては頬を伝ったが、僕はすき

ずきと痛む頭で、さつきまでみていた夢を

——いや、記憶を反芻した。

あんなに鮮やかな景色を、なぜ忘れていられたのだろうか。

ふと横を見ると、ミサキさんがいないことに気がついた。慌てて上体を起こす。景色が回るような目眩を感じた。目眩が落ち着いてから、僕はぐるりと周囲を見渡したあと、少し呆然として、それから立ち上がった。相変わらず体は痛いのが、構ってられない。小学生ぶりの木登りをして、六メートルほど登ったところで、海のほうから一筋の煙が上がっているのを見つけた。

森を出る。まだ朝だからか、素足でも砂浜はそれほど熱くなかった。ミサキさんは、日陰で魚を焼いていた。香ばしい匂いがする。空腹を無理やり忘れて眠ったときから僕の胃袋は拗ねたように食欲をなくしていたが、焼き魚の香りで機嫌を良くしたみたいだ。僕は駆け足でミサキさんのいる日陰まで行った。

ミサキさんは僕に気づくと、いたずらつ子のように笑った。よく見ると、五匹の魚が串を通されていた。砂浜に突き刺さり、焚き火を囲っている。

「すごいね」

「嬉しいでしょ」

「うん」

「この二匹はもうだいぶ火が通ったわ」

ミサキさんは魚の串焼きを二本、砂浜から引き抜いて、片方を僕にくれた。かなり湯気が

が立っている。僕は焼き魚を受け取った瞬間、なんとも言えない気持ちになった。魚は無惨にも丸焦げになっていて、これからこれを食べるのかと思うと、食欲が途端に失せていった。

そんなわけで、すぐに食べたくなかった。ので、日陰の隅に残りの焼き魚をよせている。ミサキさんをぼんやりと眺めていた。ミサキさんはこちらに戻ってきてると、焚き火の前で立ち止まり、視線を落とした。

すると、サメが獲物を仕留めるときにその獲物の周りをぐるぐると回るように、砂が焚き火を中心にして回りはじめた。砂はだんだんと厚みを持っていき、そしていきなり、目にも止まらぬ速さで焚き火を飲み込んだ。

僕はあつけにとられていた。「それで火が消えるの？」と、本当にしたいわけでもない質問をした。酸素を完全に遮断すれば消えるわ、とミサキさんが言った。僕は相槌のひとも打てなかった。

ミサキさんは、薄茶色の瞳を細めて、不器用に笑顔を作った。

「崖に行つて食べましょう。海が綺麗に見えるの。いいお天気だし、風も気持ちいいわ」「結婚式の途中だった」

そう言おうとした訳でもないのに、言葉が口をついて出た。無意識に引つ張られたんだ。ミサキさんの表情は、呆気にとられているようにも、ただじつとこちらの様子を伺っているようにも見える。その試すような視線に、

僕はなぜだか焦って、さらに言葉を吐き出した。

「貨物船にぶつかったんだ。そうだよね？」

ずっと好きだった幼なじみと——新郎は僕で、新婦は、船の上で式を挙げたいってずっと言っつて、可愛い人で、君とそっくりな人だった。名前も——」

「そのニンゲンは死んだわ」

息が止まった。

死んだ。ミサキが。

「名前は偶然ね」

弦楽器のようなよく通る声で、まるで、見透かしたみたいミサキさんが言った。

死んだなんて信じられない。あの、よく笑うミサキが？

「ちよつと、波打ち際まで行きましょう」  
ミサキさんが言った。すぐそばにいるのに、ずいぶん遠くの声を聞いているようだった。

「いやなら、ここで待っていて」

ミサキさんはそう言うのと、海のほうに走っ

た。日陰から出る時に、ミサキさんの白い肌が日光を鋭くはね返し、まるで発光したように見えた。

海と空が同じくらい青くて、水平線が捉えられない。ミサキさんはまるで、何も無い青色の空間に消えていくようだった。「ああ」と、意識せず声が漏れた。日陰とひなたの境界が滲んで、大きな黒いシミとなり、僕はそれに吸い込まれる。そんな妄想がどんどん頭の中で大きくなつていく。僕はミサキを、愛

を、希望を失った。こんな人生に用はない。ならなぜ僕は未だ死んでいないのだろうか？

いつのまにか戻ってきていたミサキさんは、大きな泥の塊を抱えていた。「なんだろう」と思ったが、声が出なかった。「なんだろうって思っただでしょ」と、また見透かしたかのように言われた。

「私、この島の砂なの」

ミサキさんは、泥の塊を砂の上に置いた。すると、塊の周囲にじんわりと水が染み出し

て、塊の周囲の砂は茶色になった。反対に、泥の塊からはすっかり水分が抜け落ちた。

砂となつてはもう塊として形を保つことができず、表面がポロポロと剥がれはじめた。やがて塊には全体にヒビが入り、紐がほどけたかのように、砕けた。

塊の中から出てきたのは、砂まみれの鯛だった。鯛は生きているが元気がないようで、断続的に跳ねている。

「こつやつて堺くんのことも助けたの。海の  
中で波に逆らうのは大変で、雑になつたかも知れない。怪我してたらごめんね」

「砂」

「そう、砂なの」

「眼、眼とか髪は、ずいぶんリアルに見えるけど」

「細かいことはいいじゃない」

「君が砂だろうが人間だろうが、何かが解決するわけじゃ」

ない、と発音した瞬間に、喉が焼けるよう

に傷んだ。ずっと続いている頭痛が悪化し、うなじまでズキズキと痛くなっている。思えばずっと、なにも飲んでいなかった。あつたとしても、飲めたか分からない。今となつてはなにも、飲みたいとか、食べたい、とも思わない。

堺くんが意識を失った。

目の前でニンゲンに倒られるなんて初めてで、意識を失っている、と気づくまで時間がかかった。助けなきや、と思うだけで、助けない、わけではない。変な感じだ。ニンゲンなんてどうでもいいのに、いつからか私の中に異物が混ざっていて、それが私を支配している。

堺くんの体の下の砂を動かして、なるべく揺れないように移動させよう。どこへ？ 分からない。ニンゲンってどうやったら助かるの？

「崖に連れて行って」



枯れた、細い声がした。堺くんだ。「そこに行けば助かるの？」と私が言うと、堺くんは曖昧に首を振った。顔は蒼白で、目がほとんど開いていない。「崖に連れていってくれ」と堺くんは繰り返した。

海岸から崖まで、そう長くはかからなかったと思う。

砂の波で運ばれている間、堺くんは喋り続けていた。

「この世から、金曜日の仕事帰りに花を買う人がいなくなつた。土曜日の昼下がりに、馬が可愛いからと言って知りもしない競馬を見る人も、月曜日の朝に、ヤドカリつて食べられるのかなあ、と質問してくる人も、どこにも存在しなくなつた」

断続的にはあるけれど、同じような内容の話を、堺くんは壊れたラジオのように繰り返していた。そして最後は必ずこの質問で締めくくつた。

「そんな世の中、なんの価値があるん

だ？  
」

堺くんはみるからに衰弱していた。昨日の夜、私にコオロギについて教えてくれたニンゲンの面影はどこにもなかった。それがすごく悲しかった。あのニンゲンはもう死んだのだと思った。

「あなたが気づかなくても、世界に価値なんてなかったわよ」

一度だけそう返した。聞こえたのかは分からない。海岸から離れると、今度は草むらが

あつた。誰も来ない島の、誰も来ない草むら。背丈ほどある草を砂で踏み潰して、私たちは進んだ。ふと振り返ると、ナメクジが這ったあとのように、私たちが歩いたあとに砂の道ができていた。

「着いたわ。崖よ」

すぐ下が海なのに、波が小さいのか、あまり海鳴りは大きくない。

堺くんは立ち上がって、海を見つめた。死人のように、虚ろな瞳だった。「夢の中みた

いだ」と堺くんが言った。たしかに、そうだ。夢の中にいるような景色。日光を反射して、海が硝子のように煌めいている。空の水色が、ところどころ白く滲んでいる。乳、星、桃、水色のグラデーション。空全体にかかる薄い雲は、桜貝の色をした煙みたい。その雲の向こうに、刺すような輝きの太陽がある。

「ミサキ、どこだ」と、堺くんが言った。どきりとした。堺くんは太陽に手を伸ばして、震える足を一步前に動かした。

「そんな状態で歩いたらだめよ」

私の声は、堺くんが届かないらしかった。堺くんは崖の淵まで行ってなお、「ミサキ」と、うわ言のように呟いていた。

堺くんは、本当に夢の中にいるのかもしれない。そう思った。ここが現実だと思っただけで、堺くんの意識下では、ここは夢の中なのかもしれない、と。

いや、夢の中にいたのは私のほうかもしれない。

一瞬で、堺くんが視界から消えた。その瞬間私は目を覚ました。助けなきやいけない、とは思わなかった。少しの迷いもない。助きたい。ただそう思つて、私は崖から飛び降りた。

海水に飛び込むと、せつかく作ったニンゲンの体が崩れはじめた。ニンゲンの、皮膚とかいうやつは弱すぎる。私は海の中で堺くんを探しながら、この体を作ったときのことを思い返した。

ある日、島からそう遠くないところで、堺くんが乗った客船と、貨物船のようなものが衝突しているのを見た。あーあ、と思つた。ぶつかつちやつた。あんなふうに燃えるんだなあ、晴れた日の夕焼けみたい。そんなことを考えていたら、『なにか』が私に触れた。私の体の、波に攫われて海に弄ばれていた、ほんの一粒の砂に。

その『なにか』にくつつかれて、その瞬間から私は、堺聡太を助けなきやという使命感

に支配された。理由は分からない。でも、生まれて初めての『目的』に、全身が高揚するのを感じた。海に漂っていた全ての私を集結させ、堺くんを掬い上げ、海から部品をかき集めて、ニンゲンを象った。堺くん以外のニンゲンはほとんど崩れていた。

神様は、どうしてこんなに弱く作ったんだろう。

生意気にそんなこと思ったくせに、私だつて上手に作れなかった。体が崩れていく。簡単に剥ぎ取られる。

白い泡の向こうに堺くんを見つけた。壊れていない。私は手を伸ばして、堺くんの腕を掴んだ。でも、私の腕はすぐにポロポロと崩れてしまう。腕は腕じゃなくなつて、ただの砂と化した。堺くんが波の向こうに遠のいていく。

もう私は、ぜんぜんニンゲンの体を保つていなかつた。とにかく必死になつて、堺くんの体にしがみつく。

海底の砂も総動員させた。堺くんの体を十分に包めるくらいのニンゲンの手をかたどり、全身を思い切り使って、堺くんを掬い上げる。高さ十メートルはあるであろう、巨大なニンゲンの両手だ。私の手の中で、堺くんはびくりとも動かなかつた。私は堺くんを高く高く掲げて——一瞬で高波に崩された。海底の砂を持ち上げた拍子に、かなり海を揺らしてしまっていた。

私は壊れ、バラバラになって海に落ちた。

堺くんはまた波にのまれていく。もう一度追いかけてようとしたとき、ほかの砂の粒よりひとときわ早く、滑るように堺くんの方に向かつていく白い『なにか』の粒が見えた。流れ星のようで、私は、それに見惚れた。

堺くんは、私の前から完全に消えた。私にくつついていた『なにか』も。それでもなぜか私は、堺くんを助けたい、と、なおも思い続けていた。

「目が覚めた？」と、目の前の女は言った。全身が重だるい。体を起こすこともできないまま、磯の香りと波の音で、海にいるのだと気づいた。

女は色素の薄い美人で、私の前にしやがみ込み、どこか湿度のある瞳で私の顔を見ていた。薄茶色の瞳が、夢のように綺麗だった。女はしばらく黙っていたが、絞り出すような声で、「私はミサキっていうの」と言った。

「そうなの。ミサキさんね。……ごめんなさい。私、自分の名前を思い出せないの」

「いいわ。ゆつくり休んで、自分のペースで思い出して」

そう言うとミサキさんは、私になにかを差し出した。湯気がたっている、おいしそうな焼き魚だった。